

「働く」とは、どういうことか？

重症心身障害児（者）との係わり合いを、生涯学習の観点からまとめたレポートを目にする機会を得た。

その中の引用文献に、「障害者の生涯学習：コミュニケーション能力、社会性を高める、自立生活能力、余暇活動、職業訓練、コンピューター等の技術的教育」が記載されていた。

「職業訓練」が入っているのであれば、なぜ「労働の喜びを得る」が入らないのかと、ふと思った。

私は、労働とか、働くは、究極的には給与を得ることだけに結びつけて考えることでないと思っている。サラリーの語源は塩のことであり、洋の東西を問わず塩は生きていくために貴重であったが、その貴重な塩さえを感謝の気持ちを込め渡したことから発生した社会的係わり方が、給与制へと発展してきたのでないかと思っている。

そうした観点に立てば、労働を人と係わることで相手へ寄与するものと考えたと、成人後の重症心身障害児（者）も多大の労働をしていますし、その労働による喜びも彼らは得ていると思う。

まあ、一般的な労働、働くという表現が適切かどうかもありますが、労働、働くの意味を考えると、彼らもアイデンティティーがあり、また周りもその労働を認めていくのでないかと、しばしば思うことがある。

そこで、「成人重症心身障害児（者）の労働ということから考え直すとしたら、みなさんは労働、働くということはどう考えるか」と、ML友にいつものように尋ねた。いつ人かのメル友からご意見をいただいた。

やはり、成人した重症心身障害児（者）と「労働」とは、現実的にはあまりピンとこないのか、返信数は十数通に留まった。それだけ、重症心身障害児（者）は、いわゆる働くとか、労働ということからは、まだ「カヤの外」ということなのかなあ。

私は、約 30 年前に柳沢監督（「夜明け前の子供たち」、「ぼくのなかの夜と朝」、「そっちゃんい こっちゃん」等々の療育記録映画監督）と、重症児病棟前の芝生に、筋ジス、重症児、重度身体障害者、ボランティア等々と互いに助け合いながら、日よけを作る過程を映像記録する中で、「私たちが働くとはどういうことなのか」を問い続けたが、地域に障害者の作業所がどんどん作られる今だけに、建物が増えることだけでなく、改めて「私たちが働くとはどういくことか」の意味を考え直してみたい。

皆さんもお考えいただき、ご意見等をお聞かせください。

（2003 年 06 月 02 日 記）